

福と石と猫と

黒田

直樹

絵
木佐貫仁美



大学生になり、夏休みを利用して尾道へ里帰りをした。幼い頃に引越してからここに戻って来るのはこれが初めてだ。一人暮らしを始めてやっと時間ができた。

天気も良かったので、母から電話で聞いたメモを頼りに外へ出掛けた。良うしろとらという名のついた神社の横にある、人が二人で通れるくらいの幅しかない、細いコンクリートの道。両脇を塀で挟まれ、乾く前に踏んでしまったのか、猫の足跡が点々と並んでいる。塀の上にはどこどころに猫の顔が描かれた丸い石が置かれていた。福石猫というのだそう。誰が置いたのかはわからないが、祖母が子供の頃からすであつたのだという。祖母が言うには、この石を三回なでると願いがかなうらしい。どこか懐かしい感じがする。

「おい」

不意に声をかけられる。あたりを見回すが、誰もいない。

「お前だ。その」

さらに呼ぶ声がある。再び見回すが、やはり人影は見当たらない。塀の上に猫がいるくらいだ。思わずその猫と目が合ってしまった、そのまま離せなくなった。

「吾輩を呼んだのは、お前か。ニンゲン」

突然、その猫の口が動き、言葉を発した。驚いて後ずさる。持っていた木桶が乾いた音を立てて落ちる。

「猫がしゃべったくらいでなんだ。驚くことでもなかるう。して、ニンゲン。何の用だ。なぜ吾輩を呼んだ」

呼んだだって。いったいどうやって。心当たりがない。それよりもこれは現実なのだろうか。



そう考えているうちに、猫が前足をなめて、しゃべりだした。

「ははあ、さてはお前、よそももの余所者だな。ここは猫の街と言われているのだぞ。その中に一匹くらい、言葉を話す猫がいても不思議ではあるまい」

「どうやら、夢ではないらしい。すぐには信じがたいが。」

「こら、ちゃんと聞いておるのか。全く、最近の人間は礼儀というものをわきまえておらん。話すらまともに聞けんとは。嘆かわしいことだ。年長者の話はきちんと聞かぬか」

「そういうと猫は姿勢を整え、しっぽをびんと伸ばして、話を始めた。」

なんでも、この猫は物心ついた頃にはすでに親はなく、そこを人間に拾われたのだという。その人間はまだ小さな子どもだった。猫と人間は毎日のように遊びに出かけた。海へ釣り

に行ったり山へ探検に行ったりした。夕方になると、家の縁側で、子供がおばあちゃんと呼んでいる者から昔話を聞かせてもらうこともあった。その者は猫を自分の膝に乗せて頭をなでてくれた。その手は大きくて暖かく、ごろごろと喉を鳴らして猫もそれに応えた。子どももそばで楽しそうに眺めていた。

「こら。まだ終わりではないぞ。最後まで聞け」
猫に一喝されて思考は途切れ、再び猫の話に耳を傾ける。

しかし、幸せもそう長くは続かず、祖母が亡くなり、人間はこの地を離れることになった。人間と一緒に猫を連れて行くとしたが、猫は頑なに拒んだ。人間が抱き上げようとすると、差し出される手を引っ掻いて拒み続けた。ついに人間は来なくなり、猫だけが残された。

「なんだ、その顔は。同情でもしているのか。別に寂しくなどはなかったのだぞ。いいからついて来るがいい」

そう言うと猫は身を翻して走り出した。その後を追いかける。石段を駆け上がり、家と家の間をすり抜けるように通り、草のはびこった斜面をよじ登る。途中で何度も見失いかけたが、そんなことはおかまいなしに猫はどんどん進んでゆく。いったいどこまで行くのかと思ひ始めたとき、急に視界が広くなつた。どうやら目的地についたようだ。猫が立ち止まった。幾つも墓石が並び、それを木が取り囲んでいた。海を望める地形のせいか日の光が降り注ぎ、不思議と安心したような気分になる。そこは墓地だった。

「こやつが一緒であつたからな。独りだということはないのだ」

墓石の横で猫が前足で指し示す。



「ここに見覚えがあるだろう。いい加減に思い出したか」

忘れるはずがない。里帰りの目的の一つはここへ来ることだったのだから。祖母が眠り、猫と別れたこの場所へ。

「ここに一人で来るのは、初めてであろう。あのときは悪かったな。こやつを残していくわけにはいかなかったのだ」

墓石を見上げながら猫が言った。

「あれからもう十年か。はやいものだ。大きくなりおつて。見違えたぞ。それでも、吾輩はすぐにわかったがな。なお前はなんだ。気づくのが遅いわ。この薄情者め。あやつの墓参りには花を手向けるのに、吾輩には鰹節すらないのか。がっかりだぞ」

そう言いながら、後ろ足で耳の後ろを掻いている。その仕草も含めて、今は猫が懐かしく見える。琥珀のような目と、なめらかな三種類の色が混じった毛並み。あの頃と全然変わっていない。

「な、なにを泣いておる。泣きたいのはこちらのほうだぞ。随分と長い間待たせおって。この借りは高くつくぞ。魚一匹程度では済ましてやらぬからな」

祖母の墓参りに来たのだが、思わぬ旧友との再会になった。どうやら、福石猫が願いごとを叶えてくれたようだ。

「感傷に浸るのも良いが、他にも挨拶をしなければならぬ相手がいるであろう。ほれさつさとせぬか」

猫にせかされて、持ってきた花を供える。墓石に水をかけてやり、合掌する。猫も彼なりの礼儀なのか、隣で頭を垂れる。葉のすれる音が聞こえる。風が吹いたようだ。

福石猫にお願いごとをするときは頭を三回なでるんだよ。

木々のささやきに混じって、祖母の声が聞こえたような気がした。

